

カピット・バレー流域、イバンの首狩りと妖怪グラシ

長谷川 悟郎*

私は現在サラワク州カピット管区のバレー流域にてフィールド調査をおこなっている。研究のおもな関心は、サラワク最大の人口をほこる在来民イバンのロングハウス農村生活における祭宴開催や機織りなど、いわゆる伝統文化とよばれる営為の今日的展開にある。最近滞在村から町に下りた際に、40歳代の町の者から、私の調査村とおなじ河川体系の最上流部のある村には「本物の首級」が保管されていることを聞いた。

「首級」とは、かつて20世紀初頭まで、そしてさらに日本軍占領期(1940-45年)と共産主義反乱期の1950-60年代に、とくにイバンは喪明けに利用するなど儀礼的要請のもと首狩りによって獲得し、また家宝として重宝してきたものである。イバン研究の第一人者フリーマンによれば、彼の調査時(1949-51年)のカピット・バレー流域(およそ3,400平方km)では、およそ8~9人に1つの割合で所持され、人口から換算して当地だけで総数1,260にのぼったという。なぜ首級かという疑問には、これまでおもに19世紀以降の西欧の人類学者らが議論を重ね、1960年代以来、豊穡カルトに基づいた「男根崇拜」のシンボルといった象徴論的説明に落ち着いてきた。

今回私が聞きつけた「本物の首級」の存在について興味ぶかいのは、これまでのイバン研究は首級を”*antu pala*”とイバン語にしたがい総じて呼んできたが、じつはこの”*antu pala*”とは、まさに「妖怪」(*antu*) (ここではそう述べておく)の巨大な首を指すというのだ。バレー広しといえどもおそらく数個しかなく、その1つを、前述の村の住人が有するという。首級の特別のものと普通のものの語彙的な区別について彼の説明はだい

ぶ曖昧だったが、もしこの話が本当であれば、イバン研究の(粋さえも超えるか)大発見スクープとなり兼ねない。しかしちょっと待て、なんだかまるで「尻尾を持つ人類」をもとめてボルネオを探訪した異国趣味あふれた19世紀西欧の探検家になった気分ではないか。そんなものあるわけがない。彼の村へ行く前に、まず周りの人びとによく聞きつつ情報を整理してみることにした。

ある80年代の研究者は、当時カピットでは1950年代からの小学校教育と60年代からのキリスト教の普及により、首狩りはかつての原始的な風習として人びとの間では話題にあげることもさへはばかれると説明した。たしかに、私はこれまで滞在村の63歳の村長に聞いたことがあったが、「棄てた」「老人に聞いてくれ」と投げ捨てるような返答をうけていた。しかし質問はより具体的にすれば何かしら聞き出せるもので、首狩りの信仰的側面が途絶えた今日でも、その余韻は若い世代の間にまで浸透していることが判明した。

19歳の町の友人は、「本物の首級」の存在は聞いたことがないとのことだったが、首級については、彼が村落に育った子どもの頃、常時食事を与えないと住人に唾を吐くなど扱いが面倒であったことを親から聞かされ、現在もそれを信じていた。また滞在村の村長だが、一日稲刈りを手伝った夜に酒を飲ませ気分を良くさせたところで改めて聞いてみたら、*antu pala*には”*antu pala mensia*”と”*antu pala gerasi*”の2種あることを説明した。前者は「人間の首級の神霊」と

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

でも訳せるだろうか、いわゆる普通のもので、後者が彼の妖怪のもの、森に棲むと信じられるグラシ *gerasi* とよばれるイバンがきわめて恐れる毛むくじらの巨大な妖怪の首級である。しかしこれを所持している村は聞いたことがないという。普通の首級については、村長が子どもの頃にはおよそ 60 家族が集めたロングハウスにおいて、それぞれ 5~10 個が入ったラタン籠が通路に 3 か所ほど吊るされていたという。金歯が付いたり、まだ髪の毛のついたままの新しい首級があったと回想し、また毎日欠かさず煙を炊き虫がつかぬよういぶしたという。なぜ首級かについては、近代国家の統制が徹底されていなかった時代、人びとはつねに自分たちの戦闘力だけを頼りとし、その能力を授かるために首級を必要としたそう。しかし村長が大人になった頃には、国家の成立と 60 年代からのキリスト教の普及などにもとない、ほかの多くの村と同様に首級はすべて「棄てた」というが、より詳しくは「墓地に埋めた」ということが分かった(ただし今日でもまだ多くのロングハウスが内々に保管し、また観光地化された所では公然と展示する)。

さて、町のイバンが説明した”*antu pala*”だが、結局これまでのイバン研究における語彙づかいは特に間違っただけのものではないことが明らかとなった。あとは、グラシの首級が彼の村に本当にあるかどうかに関心の的となるが、とりあえずグラシについて聞いてまわった。すると、村長は「今日まで見たことがない」ために信じないと否定的であったが、一方では多くの住人が恐れ信じていることが分かった。

共通して認識されるのは、グラシは天気雨の

際に現れやすく「タッ、トウィー」との声を発し、またバッタのような妖怪を連れて狩猟をおこない人間を獲物として喰うと言い伝えられていることだ。

25 歳の地元出身の小学校教師は、以前狩猟の際にその声を聞き逃げ出したという。全く同じ声で鳴く一次林に生息するニワトリより小さなタットウィー鳥というのがあるが、これとは明らかに区別され、彼が聞いたときはすぐにグラシであることを悟ったと説明する。また村では狩猟の名手の 1 人に挙げられる 30 代半ばの男は、かつて川を横断するグラシを見たといい、それはやはり毛むくじらで人間よりもひとまわり大きいものだったという。

さて今回私が町の者から聞かされたグラシの首級の存在については、たんに彼の甘美な語りであったと受け止めるのが正当であろう。そして村の住人らは、かつての認識されていた首級の価値を今日では求めていないが、そのかわら、狩猟など森に入る際は必ず岩塩の塊をグラシ除けとしてポケットに入れてゆくなど、彼(女)らの生活の中にグラシは今でも存在する。岩塩以外にも、森に植生するスルカイとよばれる木の樹皮を焚くことがすべての「妖怪」を除ける効果を持つとされ、この放たれるあまい香煙はグラシをも弱ませ何もできなくさせると信じられる。とくに儀礼開催など何か重要な行いの前夜や、定期的に木曜日の夜に家屋の軒先で焚かれる。

本ノートでは、首級からグラシへと焦点は若干飛躍したが、近代的学校教育とキリスト教の普及にもとない急速に忘れ去られたといわれるイバン古来の神霊信仰の根強い健在ぶりを記した。彼の村へは、稲作が一段落する来月 4 月に訪れてみたい。

2009 年 3 月 カピット・ムージョン川より